

エリザベス・ギaskellの短編小説 「リジー・リー」と「ペン・モーファの泉」の女性たち

On the Women in Elizabeth Gaskell's Short Stories
“Lizzie Leigh” and “The Well of Pen-Morfa”

直野 裕子
Hiroko NAONO

1. はじめに—1850年出版の作品

エリザベス・ギaskell (Elizabeth Gaskell) 最初の長編小説『メアリ・バートン』(*Mary Barton*) は、1848年10月に出版されるや文壇に大きな反響を呼び起こし、当時の文学界の大御所チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) にも絶賛された。1850年1月ディケンズから、社会の底辺の人々を引き上げ社会状況を改善することを目的とする新しい週刊誌への寄稿を依頼され (Gérin 106, Uglow 205)、それに応えてギaskellが寄稿した短編が「リジー・リー」 (“Lizzie Leigh”) である。1850年3月30日付けの創刊号『ハウスホールド・ワーズ』 (*Household Words*) の冒頭、ディケンズの「創刊の言葉」 (Preliminary Word) に続く名誉ある位置を飾った。4月13日までの3回に分載され (Shattock 129)、これが好評であったため、さらに依頼されて寄稿したのが「ペン・モーファの泉」 (“The Well of Pen-Morfa”, 11月16日号、23日号掲載) (Shattock 157) と「ジョン・ミドルトンの心」 (“The Heart of John Middleton”, 12月28日号掲載) である (Shattock 177)。この年には他に、8月に脱稿し12月に単行本として出版した中編小説『荒野の家』 (*The Moorland Cottage*) がある (Shelston 1)。

この4作のいずれにおいても、当時の父権制社会の中で単に男性に服従するのではなく、自分を主張し行動する女性や、男性に大きな影響を与える女性が登場する (Uglow 25)。「リジー・リー」と「ペン・モーファの泉」では男性に裏切られた女性の生き方が問題とされ、母親が大きな力を発揮する。『荒野の家』では息子の成長に悪影響を及ぼす溺愛する母親と、信仰に裏打ちされた理性的で大らかな愛を注ぐ母親が登場し、後者の影響を受けて実の娘ではない少女が自立心ある女性に成長する過程が描かれる。「ジョン・ミドルトンの心」では男性主人公が信仰篤い妻によって真のクリスチャンに目覚める過程が描かれる。

本論では子供のため、特に娘のために行動し主張する母親像が描かれている「リジー・リー」と「ペン・モーファの泉」を取り上げる。

2. 「リジー・リー」の女性たち

この短編の主人公はリジー・リーというより母親アン・リー (Anne Leigh) である (Pollard 87)。マンチェスターに奉公に出た娘リジーが男に誘惑されて妊娠し奉公先を解雇され、アンは娘の身を案じてすぐにも探しに行きたいのだが、夫は許さない。娘は死んだものと思え、けっしてその名を口にするなと命じる。したがって 17 歳にもならないリジーは子供を抱えて収入を得る術もなく、生きるためには転落の道を歩む他ないのは明らかであった。

リー夫妻は結婚して 22 年、そのうちの 19 年間、アンは夫を非のうちどころがないほど正しい人、神の教えを説いてくれる人として完全に信頼し夫に従ってきた。いわば当時の典型的な理想の妻であったが、夫が娘を勘当して以来、夫への反発心を抑えられず、妻としての義務感も愛や尊敬の念もかつてのように持つことができなくなる (206-7)。

しかし、夫ジェームズ (James) は妻アンに、“I forgive her, Anne! May God forgive me!” (206) という言葉を残して亡くなる。なぜ彼は神に赦しを求めたのだろうか。当時の社会規範に従ってパリサイ人のように娘を裁いて赦さなかったからである。「裁くのは神であって人ではない」、この信条はギヤスケルのすべての作品の基調をなすが、リジーに赦しを与えることがテーマとなっているこの短編では、それが顕著に示されている。ちなみに、この言葉をそのまま母アン・リーと聖母マリアを思わせるような女性スーザン・パーマー (Susan Palmer) に語らせている。

2-1 母親アン・リーの行動開始に必要な条件

2-1-1 精神的支え

夫の最期の言葉を聞いてアンは心から夫に感謝し、「再び彼を家長の座に戻し」(207)、夫を恨んだことを詫びたい気持ちになる。家族を守るためにも世間の許さぬことを認めるわけにはいかなかった夫の苦しい心中を思いやることなく、この 3 年間ただ心の中で恨み反抗するばかりであったことを悔い、自分がやさしく働きかけていたら夫はもっと早く娘を許してくれたかもしれない (“...who knew but what, if she had only been more gentle and less angrily reserved, he might have relented earlier—and in time?” 207) と後悔の念、自責の念に苦しみ、夫の亡骸につき添って離れようとしめない。ギヤスケルは、ただ夫に従うだけでなく妻の側の働きかけが必要なことを、ここ冒頭で示唆する。

彼女がようやく亡骸のそばを離れ、息子たちの用意してくれたお茶をすませた後、読んでほしいと頼んだのは、聖書の「放蕩息子の譬え話」(ルカ 15: 11-32) である。次男トムの朗読にアンは顔は明るくなり、自分でも指で字をたどりながら読む。特に悔い改めた息子を父が優しく迎える箇所、「彼女の気分は晴れやかになる」(208)。

ルカ伝では、放蕩の末帰還した弟を喜んで迎え祝宴を開く父に対して、父に忠実であった兄が抗議すると、「…このあなたの弟は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのは当たり前である」と父は答える。この言葉にアンは救われ力を得たのである。母親にとっては娘も息子も同じ子どもで、娘が悔い改めて帰ってくれば、この父

のように夫も喜ぶに違いないと確信する。

作者ギヤスケルがここで「マグダラのマリア」(ルカ 7:36-50)ではなく、「放蕩息子」を取り上げたのは、Stonemanの指摘のように、現実社会が罪人に男女差別をしていることに注意を喚起するためである(43)。当時の多くの読者は、悲しみのあまりアンは愚かにもその場にふさわしい聖書の章を選べなかったと解釈したかもしれない。しかしアンに繰り返しリジーを「放蕩息子」と結び付けて語らせている(211, 230, 241)ことから、ギヤスケルの真意は明らかであろう。アンは、夫の娘を赦すという言葉と聖書の譬え話を精神的な支えとして行動を開始する。

2-1-2 経済的基盤と長男の同意

アンは未亡人になって夫の支配を受けずに自由に行動できるようになったのは確かである。しかし、死ぬ間際に娘を赦すと言った夫は、心の中ではそれを常に願っていたに違いなく、働きかけなかった自分にも責任があることに気づき、何としても娘を探しに行かなければならないと思う。しかしそれには経済的な基盤と息子たちの同意が必要である。

リー家に代々受け継がれているアップクローズ農場(Upclose Farm)は、母屋と離れ屋、荒れた収穫の上がらない7エーカーの農地からなり、これに頼るだけでは生計は成り立たず、代々息子たちは車大工や鍛冶屋の仕事に就くのが慣わしで、リー家は労働者の身分を出ることはない。夫の遺言状には、農場を「忠実な妻アン・リー」(“his faithful wife, Anne Leigh” 209)に譲り、彼女の死後長男に譲るとある。これは夫の妻への愛情の証であり、これによってアンには娘を探しに出かける経済的基盤ができる。

昔からの友人サミュエル・オーム(Samuel Orme)が預かっていた遺言状を読み上げると、アンは、農場を貸してマンチェスターに行きたいと相談を持ちかける。当然のこととして、サミュエルは息子たちの同意を条件とする。

長男ウィル(21歳)は父親に似て厳格で、妹のことを恥と思い死んだものと思っている。母の計画を無駄なことだと思うが、母が妹を探しに行こうとするのを断固として許さなかった父を厳しすぎると思っていたこともあり、1年後に帰ることを条件にマンチェスター行きに同意する。ウィルは鍛冶屋の仕事をし、姉リジーは死んだと思っている10歳年下のトムには、ほんとうの理由は知らせないで学校に行かせることにする。決定権はあくまでも長男にある。しかし、リジーの探索を決断し実行に移すのは、母アンである。

2-2 工業都市マンチェスターでの生活

マンチェスターに移って、アンは夜になると娘を探しにそっと家を出て、帰るのは夜中を過ぎる。知らぬ顔をして母の帰りを待つウィルは、疲れた母の顔に失望だけでなく希望が表れているのを見ると何も口には出せないが、母の行動を望みのない愚かなものだと思う。

2-2-1 スーザン・パーマーとの出会い

ウィルはある日、泥酔して足元のあぶない老人パーマーを家まで送り届けて、娘スーザン（20歳前後）と出会い恋をする。ウィルにとってスーザンは、汚れのない聖女のような存在で（スーザンを形容するウィルの言葉を挙げてみると、“pure and maidenly” 216、“the holy and pure” 237、“sweet, delicate, modest Susan” 217、“... she’s so gentle and so good—she’s downright holy. She’s never known a touch of sin.” 220）、妹のふしだらを知れば自分は拒否されるに違いないと思悩む。ウィルの憔悴をトムの手紙によって知った母アンは、娘のことに夢中になるだけでなく、同じ子どもとしてウィルにも愛情を注がねばと反省し、悩みを告白させる。

妹ゆえにスーザンへの想いを諦めようとしているウィルにアンは、スーザンがリジーのような娘を哀れだと思わないなら、残酷なパリサイ人だから、そんな人はいない方がウィルのためだと言う（“Will, Will! if she’s so good as thou say’st, she’ll have pity on such as my Lizzie. If she has no pity for such, she’s a cruel Pharisee, and thou’rt best without her.” 220）。

アンは元来内気なのだが、ウィルに内緒でスーザンに会いに行き、息子のスーザンへの想いを伝え、さらに勇気を奮い起こして娘リジーのことを話す。これは、ひとえに息子や娘への深い愛のなせる業であると言えよう。

アンは自分にもリジーにも深く同情するスーザンを、息子にふさわしい立派な女性だと判断する。さらにスーザンが育てている2歳のナニー（Nanny, Anneの愛称）はスーザンの姪ではなくリジーの娘で、「不義の子」（“the child of shame” 229）と踏んで哀れみ引き取って、外で働くのを止め、幼い子どものための学校を家で開いて収入を得ていることを知る。

リジーは子どもの養育費をときどき戸口に置きに来るので、今度来たらつかまえて引き留めると言うスーザンに、アンはリジーが見つければ抱いて一緒に死ぬと言う。世間はリジーに死の制裁しか認めないと思うからである。しかし、「（リジーは）マгдаラのマリアのように更生するかもしれない」（225）という希望にみちたスーザンの言葉を聞いて、スーザンのことをパリサイ人どころか、「新約聖書に精通した」真のクリスチャンであり、自分と同じような考えを持つ人であると確信する（“She’s not one to harden her heart against a mother’s sorrow. . . . she’s too good for that. She’s not one to judge and scorn the sinner. She’s too deep read in her New Testament for that.” 228）。

2-2-2 母親アンの説得

アンは、ウィルに対してスーザンのようにリジーの子を愛してほしいと頼むが、ウィルには、スーザンのように神々しいまでの女性が汚れたリジーや不義の子と関わるなど思いもよらず、考える時間を与えてほしいと言う（229）。息子のこの返事にむしろ気をよくしたアンは、スーザンという強力な味方を得て自分の考えに自信をもつことができているので（松岡 231）、夫に似た性質や考え方の長男に対しても、これまでのように「懇願し、おとなしく従う母」（“the meek, imploring, gentle mother” 230）ではなく、「神の思召しを伝える者」（“the interpreter of God’s will” 230）のように威厳ある態度で、次のようにリジーを赦して優しく迎えるように説得する。

“Will, my lad, I’m not afeard of you now, and I must speak, and you must listen. I am your mother, and I dare to command you, because I know I am in the right and that God is on my side. If He should lead the poor wandering lassie to Susan’s door, and she comes back crying and sorrowful, led by that good angel to us once more, thou shalt never say a casting-up word to her about her sin, but be tender and helpful towards one ‘who was lost and is found,’ so may God’s blessing rest on thee, and so mayst thou lead Susan home as thy wife.” (229-30)

プライドの高い頑固なウィルも、いつもとは違う母の態度や言葉に圧倒され、敬意を払うかのように頭を垂れ、“Mother, I will.”と答える。しかしながらギヤスケルは、アンが気を失いかけて息子の手当を受ける場面をすぐ後に加えて、強い母のイメージを弱める。

2-2-3 ナニーの死、そしてスーザンの父のこと

アンの喜びが最高潮に達した直後、場面は暗転し、ナニーが命を失う。ナニーの死は、リジーの罪を償うために設定してある。しかしそれは、一つにはスーザンの父の不甲斐なさに原因があることをギヤスケルは暗に示しているように思われる。ナニーは、一緒に寝ていたスーザンが、泥酔して帰った父の火の不始末を恐れて階下に降りたため、寝ぼけ眼でスーザンを探していて階段から落ちたのである。気も転倒せんばかりの中、スーザンが慌しく動き回っているのに、ぐっすり眠ったままの父親のことを、“useless, and worse than useless, if awake” (231) と述べる作者はかなり手厳しい。彼はナニーが死んだのはスーザンのせいだと責めたり、慰めるつもりで、自分たちの子ではないのだから死んでくれてよかったと言って、ますますスーザンを悲しませたり、スーザンの手助けもせず、近所に事故の顛末を話しに行ったりする。彼は昔羽振りを利かせていたが商売に失敗して以来、働かず酒に溺れ、娘に養ってもらっている。それでもスーザンは忍耐強く母親のような愛情でやさしく父の世話をする。父権制社会の下、娘は父に従うのが当然の義務とされたが、そうした点にギヤスケルが批判の目を向けているのは明らかであろう。

2-2-4 スーザンの説得

スーザンの家の二階で母と娘が再会し、罪を悔いる娘に、母アンは変わらぬ愛と赦しを与え、父の赦しを伝え、これからずっと一緒に暮らすから恐れる必要はないと慰める。一方、階下ではリジーを赦すようにスーザンがウィルを説得する場面が展開する。

ナニーの死、リー夫人とリジーが二階にいることをウィルに知らせた後、スーザンはリジーのことはすべて知っているが、わが子まで失ったその苦しみのほどは想像もつかないと言うと、ウィルは、リジーが苦しむのは当然の報いだと答える。スーザンは、「裁くのは神さまであって私たちではない」(237)、厳格さではなく哀れみの心を持ってほしいと言ってウィルを説得しようとする。

“Will Leigh! I have thought so well of you; don’t go and make me think you cruel and hard. Goodness is not goodness unless there is mercy and tenderness with it. There is your mother, who has been nearly heart-broken, now full of rejoicing over her child—think of your mother.”
(237-38)

ウィルは母と約束したときのように、スーザンにも考える時間を与えてほしいと頼み、次のように言う。

“If I did hang back a bit from making sudden promises, it was because not even for love of thee, would I say what I was not feeling; and at first I could not feel all at once as thou wouldst have me. But I’m not cruel and hard; for if I had been, I should na’ have grieved as I have done.” (238)

ウィルの誠実な言葉に、スーザンは自分の不用意な厳しい言葉を悔やんで許しをこう。その口調はやさしい限りで「その狼狽振りには言葉以上の多くのことを語っていた」(238)。ウィルはここで愛を確信するに至る。スーザンはウィルとの関係においては控えめながら恋する女らしさを見せるように描かれている。彼女の主たる役割は、パリサイ人的ウィルを説得してリジーを受け入れることのできる真のクリスチャンに変えていくことにあるが、彼女がウィルの恋人であることが、何にも増してその説得力を強める要因となる。

2-3 後日談、その他「リジー・リー」について

この短編の最後の1ページにリー家のその後が記される。ナニーの亡骸は、アンの夫の眠る教会墓地ではなく、昔クエーカー教徒が葬られた丘の墓地に埋葬される。ウィルとスーザンは結婚してアップクロース農場で暮らし(リー夫人は農場を生前に息子に譲ったことになる)、リー夫人とリジーは人里離れた小さな谷間の小さな家に住む。トムはロッチデールで教師になり、息子二人が母を経済的に支える。リジーは、苦しんでいる人や病人が助けを求めるときはいつでもその声に応え、多くの人に感謝されるが、わが子との再会を願い神の赦しを求めて祈りの生活を送る。リジーはわが子同様、リー家の仲間入りはさせてもらえない。しかし母アンは、社会規範の保護の枠内に留まるよりも、「失って見つけ出した大切な宝」(249)である娘リジーと一緒に暮らせることを幸せに思う。

スーザンは母となる。「みんなに幸福をもたらす明るい光となり、子どもたちは彼女のまわりで成長し、彼女のことを聖女のようにだと思っている」(“Susan is the bright one who brings sunshine to all. Children grow around her and call her blessed.” 241)と説明されている。彼女は最後まで聖母マリア的役割を果たす存在で、リアルな人物とはいいい難い。

男性に誘惑されると、女性には厳しいモラルスタンダードが適用され、男の責任は問われな
いまま、捨てられた女性と子どもは厳しい運命を辿る。理不尽なことであるが、こうしたダブ

ルスタンダードによって生み出される不幸な女性たちを救おうとギヤスケルは社会活動も行っていたが (Uglow 246)、『メアリ・バートン』の序にあるように、「苦しむ人たちの代弁者」となってその実情を世の人たちに訴え、注意を喚起することがギヤスケルの小説執筆の動機であり、目的であった。『メアリ・バートン』のエスタ (Esther) は、男に捨てられ病気の娘のために転落の道を辿り、サミュエル・リチャードソン (Samuel Richardson) 以来の伝統の枠内に留められて、救われぬまま哀れな生涯を閉じる (Pollard 87)。こうした“fallen women”を救うに大きな力があるのは、母親の子どもに対する見返りを求めない愛で、それは子どもを生んだ母親だけにあるのではなく、スーザンのように真のクリスチャンには備わっているとギヤスケルは考えている。しかしながら、“fallen women”を救うことがいかに困難なことか、ギヤスケルはよく承知していて、一家を支配する家父長に「赦す」と言わせるとすぐ死亡させた上で、跡継ぎの (母親に対して父親ほど厳しくない) 長男を説得するために、母親だけでは足りなくて、聖母マリア的で、しかも恋人という役割まで担った女性を登場させるのである。

リジーは更生の道を歩むことになるが、子供の転落死については、Easson が言うように「不必要なほど高価な代償」 (208) に思われ、その点に当時の社会通念を超えられなかったギヤスケルの限界を見ることもできるだろう。しかし当時タブー視されていた“fallen women”の問題を小説に取り上げること自体かなり勇気の要ることで (匿名で掲載されると知っていたからこそ可能であったにしても)、それは次のようなギヤスケル宛てのリー・ハント (Leigh Hunt) の手紙によっても明らかであろう。“... I am sure you are not the woman to be custom's slave. Witness your brave and lovely good word in behalf of the unhappiest of your sex.” (Rubenius 181)

この短編ではリジーの更生については簡単に触れてあるだけで、あくまでも救う立場のあり方が問題にされている。未婚の母がヒロインになるのは長編小説『ルース』 (Ruth, 1853) を待たなければならない (Pollard 87)。

3. 「ペン・モーファの泉」の女性たち

この短編は、語り手が北ウェールズを旅行したとき、男性に捨てられた女性について聞いた話を思い出して語る形式をとる。語り手が訪れたのは、まだ大資本家が土地を買い占めに来たことがない人里はなれた村々の一つ、旅行者のめったに訪れない古い村ペン・モーファで、人々の暮らしは金銭に支配されない自給自足に近いシンプルなものであった。この短編で語られる主たる物語は、それより一世代前の人たちのことである。

3-1 最初のエピソードの母と子

最初に語られるのは、語り手が出会った厳しい顔つきの寡黙な女性—かつてはペン・モーファの美女と呼ばれていた女性についてである。彼女は奉公先の家族についてロンドンに行くが、1年ほどで帰って来たときには美貌は消え、悲しい絶望的な表情となり臨月を迎えていた。生

まれた子は下半身に障害をもち、以後彼女は、寝たきりで苦しむ子どもの看病をしながら養蜂でわずかな収入を得て暮らす。“One event had made her savage and distrustful to her kind.” (244) とあるように、彼女は男に裏切られて人を信じられなくなり、誰とも付き合おうとしない。彼女の無言の忍耐と辛抱強い子どもへの愛情は村人たちに尊敬の念を引き起こし、誰もが喜んで助けの手を差し伸べようとするが、彼女は誰の手も借りようとする。

彼女には帰る故郷があって転落の道を辿らずにすみ、辛く厳しいながらも独立自尊の生活を送る。彼女がロンドンにいる間に、わずかな金銭を残して父親が亡くなったのは、彼女にはむしろ幸いだったと思われる。父親はリジーの父同様、娘の帰郷を認めなかったかもしれないからだ。

“I dare say the story is common enough; . . .” (244) と語り手が言うように、女性が男性に裏切られるのは昔からよくある話で、この親子には名前も与えられていない。また障害を持つ子どもについてはほとんど触れられていないが、“Many, many years back—a lifetime ago—there lived in Pen-Morfa a widow and her daughter.” (245) と語り始められる主たる物語では、事故によって障害を負い婚約者に捨てられる娘が中心人物となる。母親の娘への愛、そして恋人に愛を拒否され、母の愛を拒否した娘が持つに至る見返りを求めない愛が、美しいウェールズの自然を背景に語られる。

3-2 母親エレナ・グウィン

寡婦エレナ・グウィン (Eleanor Gwynn) は小さな庭のある小さな家を夫から受け継いでいて、「なんとか自活できるだけの収入があり、貧しくもなく金持ちでもない」 (245)。この点は重要で、はじめのエピソードの女性と違って、エレナには働かなくても暮らせるだけの収入があり、娘が男に裏切られても経済的な問題は生じない。

3-2-1 娘ネストの転倒

エレナの娘ネスト (Nest) は美しく、自分でもそう思って喜んでいる。母親は娘の思い上がりをたしなめ、美しさは神様の贈物だと説教するが、娘は気にも留めない。元気いっぱいの彼女は、老若男女すべての人を喜ばせずにはいられなくて、それには笑顔と優しい言葉で十分だった。中にはそれを曲解して彼女のことを浮気女だと言う者もいたという説明もあるが、ネストが美しさを自慢に思うにしても、あるいは日課の水汲みに、婚約者エドワード・ウィリアムズ (Edward Williams) と途中まで一緒というので水汲みには不似合いな服装で出かけたにしても、Walters が指摘しているように、ネストに罪があるとは考えられていない (15)。おごりや不注意のせいで転倒したとしても、それは誰にでも起こりうることで、罪に対する報いではない。ネストは不運にも氷の張った岩場で滑って転倒し、下半身不随となり、愛する婚約者に捨てられる。結婚を前に幸せ一杯、有頂天であった娘が、急転直下弱者の立場になる。この短編は、誰でも弱者の立場になりうることを前提にした物語と断言していいだろう。

母エレナはまず娘の命が助かるように必死の看護をするが、それには恋人の力がぜひ必要な

ことを知っており、エドワードの足がだんだん遠のくのを心配して行動を開始する。

3-2-2 娘の婚約者エドワードに対するエレナの懇願

「時の果て」(“The End of Time”)と呼ばれる農場の主人エドワードを訪ねたエレナは、怒りや非難を露わにしたいのを抑え、礼儀正しくエドワードの娘に対する気持ちを尋ねる。エドワードは、ネストの命は助かるが障害は一生治らないと医者から聞いたことを伝え、農場の仕事はきついから健康で有能な妻でないと務まらないと含みのある言い方をする。エレナは“Though her body may be crippled, her heart is the same . . . and full of love for you.” (252) と訴える。自分ほどよい条件でなければ結婚してくれる男もいるだろうと冗談めかして言う無神経なエドワードに、エレナは思慮分別を失ったかのように怒り、エドワードに明言を迫る。“I cannot—no one would expect me to wed a cripple. . . .”と言うエドワードに “. . . surely will God and His angels watch over my Nest, and avenge her cruel wrong.” (253) と叫んで、エレナは帰りかけるが、また引き返して謝罪し、エドワードに抗議したい思い—事故に遭う前に結婚した可能性もあったわけで、結婚後にネストが事故に遭っていたとしたら、どうするつもりだったのかと問い詰めたい思いを抑え込んで (“It was likely, was it? and you to have been her husband before this time, if—oh, miserable me! to let my child go and dim her bright life! . . .” 254)、事実を知れば娘は死んでしまうから娘が元気を回復するまで、愛している振りでもいいから見舞いに来てくれと身を屈して頼む。利己的なエドワードに対して、必死に娘を守ろうとする母エレナの忍耐と勇気、人間としての大きさが際立たせてある (Walters 16)。

3-2-3 娘ネストに拒絶される母エレナ

ネストは回復し元気になるが、杖なしでは歩けず美貌はけっして戻ることはない。それでもエドワードが来ると目が輝く。これ以上エドワードに無理強いはできないと判断した母親はつらい思いを抑えて、ついに事の真相をネストに告げる—下半身の障害は一生治らないから農場主の妻としては失格なのだ。ネストは悲しみを胸の奥に閉じ込めたまま、以後母にも心を開こうとしない。家に引きこもって外に出ないのは、見た目のためではなく、恋人に捨てられたことを哀れに思われたくないためで、誇り高い娘は母の慰めも一切受け付けず心を開ざしてしまう (多比羅 55)。

ネストには、エスタやリジーと違って、母となって愛を注ぐ対象もない。母エレナは娘のために長生きしたいと神に祈っていたが、慰めも手助けも拒否し、むしろ肉体を酷使し激しい疲労を伴う仕事を望む娘を前にして、なす術もない。エドワードの結婚の噂を聞いたネストは、“Mother, why did not you let me die?” (255) と言って母を責め、あまりの辛さに泣く母に謝りはするが、過去にとらわれたまま現実の自分の身を受け入れることができず、“I wish I had died when I was a girl and had a feeling heart.” (255) としか言えない。これに答える母エレナの次のような言葉には見返りを求めない娘への愛があふれている。

“... God has afflicted you sore, and your hardness of heart is but for a time. Wait a little. Don't reproach yourself, my poor Nest. I understand your ways: I don't mind them, love. The feeling heart will come back to you in time. Anyways, don't think you're grieving me, because, love, that may sting you when I'm gone; and I'm not grieved, my darling. Most times we're very cheerful, I think.” (257)

この母の言葉通り、ネストは母の死後、人を思いやる優しい心を取り戻すことになる。

3-3 巡回説教師デイヴィッド・ヒューズの導き

エレナは長生きしたいと神に祈らなくなる。娘の傷ついた心を慰める力はないと自覚し、生きる希望も信仰心も失いそうになるが、死の床についたとき、メソヂイストの巡回説教師デイヴィッド・ヒューズ (David Hughes) の導きを受ける。娘を慰めることができるように神に祈っても聞き届けてもらえないという訴えに、デイヴィッドはイエスのゲッセマネでの祈りに触れ、「神の時は我われの時とは違う。81年の私の生涯で真剣な祈りが聞き届けられなかったなどということは一度も聞いたことがない。誰も知りえない方法で誰も待ち受けていない時に神の答えはやってきた。予期した答えとは違っていても、…完全で納得のいく答えだった」(258)と自分の経験を語る。この言葉に力づけられエレナは穏やかな死を迎える。

母を失って “No one loves me now.” というネストに、“... if no one loves you, it is time for you to begin to love.” (259) とデイヴィッドは答える。ネストは恋人を愛し、その愛が拒否されて以来優しさを失って残酷になり、母の愛を拒否したまま母を亡くしてしまったことを嘆き悲しむ。

デイヴィッドは、ネストの恋人への愛は若者の激しく狂おしい愛で、これからは自分のことを考えたり見返りを望んだりせず、イエスのように人を愛し、病気の人や疲れた人を喜んで受け入れて愛しなさいと諭し、さらに次のように言う。

“... That love will lift you up above the storms of the world into God's own peace. The very vehemence of your nature proves that you are capable of this. . . . You are powerful enough to trample down your own sorrows into a blessing for others; and to others you will be a blessing. . . . I see it in the answer to your mother's prayer.” (260)

ネストはデイヴィッドの導きの言葉通りの後半生を送り、母の祈りは聞き届けられる。

3-4 ネスト・グウィンの償いの後半生

母から受け継いだ小さな家に、ネストは教区が賄い費を出している知恵遅れのメアリ・ウィリアムズ (Mary Williams) を引き取る。彼女は時に発作を起こし凶暴になるので、預かり先のジョン・グリフィス (John Griffiths) は手を焼いて叩いたり食べ物を与えなかったりした。そんなある日彼女は助けを求めてネストの家に行く。エレナがときどき食べ物を与え優しい言葉を

かけていたことを覚えていたからである。母エレナの保護を求めてやってきたメアリをネストが引き取ったのは、生前母の愛を拒否したことをひどく後悔し、最も困難なことをして償い、安心を求めようとしたからである。メアリが発作を起こすときは、ネストは自分だけが付き添い、人を近づけない。メアリが従順で愛情深く無邪気なことは話しても、ひどく荒れ狂うときは誰にも話さない。

メアリを愛することによって頑なに閉じていたネストの心の扉が開く。ネストに愛を注ぎ続けた母エレナのように、ネストはメアリに愛を注ぎ続け、メアリにとっての「天の恵み」(a blessing 260)になる。メアリも「目の見えない主人を物言わぬ動物が愛すように」(263) ネストを愛した。最初のエピソードの女性と違ってネストは村の人々と付き合い、病人や悲しむ人たちを慰めに出かけるし、子どもたちも好きなとき家に遊びに来る。彼女の心の扉は大きく開いたのである。

事故から30年後、ネストはメアリに助けを借りて泉に行き、岩にもたれたまま静かに息を引き取る。明け方近く彼女は、天国に住む母が嬉しそうに歓迎して彼女に両腕を差し出す夢を見た。語り手は“*She found immortality by the well-side, instead of her fragile perishing youth.*” (265) と述べる。母エレナの娘に対する愛は、壊れやすい男女の愛に勝るものであり、ネストは見返りを求めない愛の実践に生きることによって母の愛に応え、心の安らぎを得る。メアリは発作が起きたときネストの名前を聞くと、自分を抑えようと驚くほどの努力をすることが最後に語られる。

4. むすび

「リジー・リー」では男性に裏切られた女性を救う側に重点がおかれ、「ペン・モーファの泉」では救う側だけでなく当の女性の苦しみとその克服の過程が描かれている。

イエスを神ではなく人間と見て倫理上の理想とし、理性を尊重し、愛の実践を重んじ、人間の善性、可能性を信じ、原罪を認めない。こうしたユニテリアンの信条がギヤスケルの創作の基盤となっているが、この二つの短編、特に「ペン・モーファの泉」では、それが顕著に表れている。

二つの短編に登場する女性たち、忍耐力をもって困難に立ち向かう行動力あるアンやスーザン、エレナとネスト母娘を見ると、家父長制社会にあつて弱い立場にある女性も愛と信仰の力によってかなりのことができるのではないかと思われる。しかし、ギヤスケルが彼女たちを、夫や父のいない、しかも経済的には困窮しない状況下に置いていることを見過ごしてはならないだろう。夫や父がいないのは、頼る者がいなくて自分で考え行動せざるを得ない逆境にあるとも言えるのだが、服従すべき相手がいなくて自分の裁量で自由に行動できるということでもある。アンやエレナは、経済面をあまり考慮する必要もなく、支配する夫、服従すべき夫もないがゆえに、娘に対する思いを何とか行動に移すことができるのである。

一方、81歳の巡回説教師デイヴィッドを除く男性登場人物、ジェイムズ、ウィル、スーザンの父、エドワード、ジョン・グリフィスなどについては、かなり批判的に描いてある。ギヤスケルは、『ハウスホールド・ワーズ』誌には作品が匿名で掲載されることを知って、ある程度自由に、タブー視されている問題や社会通念に必ずしも合致しないことを取り上げ、時代の規範に批判の矢を放ちつつ、母、妻、あるいは娘として女性は、どのような状況下でどのように力を発揮することができるのか、書くことによって試していたのではないかと思われる。

引証資料

Easson, Angus. *Elizabeth Gaskell*. London: Routledge & Kegan Paul, 1979.

Gaskell, Elizabeth. "Lizzie Leigh", "The Well of Pen-Morfa". *The Works of Mrs. Gaskell*. Ed. by A.W. Ward, Vol. 2. 1906: New York: AMS Press, 1972.

Gérin, Winifred. *Elizabeth Gaskell: A Biography*. Oxford: Oxford University Press, 1976.

Pollard, Arthur. *Mrs. Gaskell: Novelist and Biographer*. Manchester: Manchester University Press, 1965.

Rubenius, Aina. *The Woman Question in Mrs. Gaskell's Life and Works*. New York: Russell & Russell, 1973.

Shattock, Joanne. Headnote to "Lizzie Leigh", Headnote to "The Well of Pen-Morfa", Headnote to "The Heart of John Middleton". *The Works of Elizabeth Gaskell*. Vol. 1 Journalism, Early Fiction and Personal Writings. Ed. by Shattock. London: Pickering & Chatto, 2005.

Shelston, Alan. Headnote to *The Moorland Cottage*. *The Works of Elizabeth Gaskell*. Vol. 2 Novellas and Shorter Fiction I. Ed. by Shelston. London: Pickering & Chatto, 2005.

Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. Brighton: The Harvester Press, 1987.

Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1993.

Walters, Anna. Introduction to *Elizabeth Gaskell: Four Short Stories*. London: Pandora Press, Routledge & Kegan Paul, 1983.

多比羅真理子『ギヤスケルのまなざし』鳳書房、2004。

松岡光治「ギヤスケルの短編小説における愛の諸相—沈黙、憎しみ、母、自己犠牲—」山脇百合子監修『ギヤスケル文学にみる愛の諸相』北星堂書店、2002。